

社会的スキルの低い中学生に対する 集団社会的スキル教育の効果

江村理奈・磯部美良・岡安孝弘・前田健一

The effect of classroom-based social skills education on social skills and loneliness
of junior high school student with poor social skills

Rina Emura, Miyoshi Isobe, Takahiro Okayasu, and Kenichi Maeda

本研究では、中学1年生を対象にして学級を単位とした集団社会的スキル教育を実施する中で、社会的スキルの総得点が学年全体の平均値よりも顕著に低い5名の生徒に焦点をあて、社会的スキルの改善や孤独感の低減に及ぼす集団社会的スキル教育の効果を事例的に検討した。その結果、5名中1名では、社会的スキル教育の実施後に社会的スキル総得点が学年全体の平均水準まで上昇するとともに、孤独感も低下し、集団社会的スキル教育による改善効果が認められた。しかし、他の4名では社会的スキルの上昇は認められたものの、学年全体の平均水準までには達しなかった。また、これら4名の孤独感にも顕著な変化はみられなかった。3つの社会的スキル下位尺度の変化パターンから、社会的スキル総得点の低い生徒に対する集団社会的スキル教育は、少なくとも自分から積極的に仲間に働きかける関係参加行動の改善には有効であることが示唆された。

キーワード：集団社会的スキル教育，中学生，社会的スキル，孤独感

問題と目的

昨今のいじめや不登校などの学校不適應の背景要因には、子どもたちの対人関係能力の低下があると指摘されている。核家族や一人っ子が増え、また塾や習い事に通う子どもたちが多くなるにつれて、以前であれば、仲間との遊びやきょうだいげんかなどを通じて、いつの間にか身につけていた対人関係の技術（社会的スキル）を、今は身につける機会さえ失われつつあり、学校等の集団の場で補足的に教える必要性が生じている。社会的スキル訓練（social skills training；以下 SST と略す）は、子どもの対人関係能力の向上や改善をはかり、子どもの社会的適應を目指す介入指導法である。SST は、引っ込み思案児や攻撃児など社会的不適應の問題を抱えた子どもの治療技法として開発され、個別形式や小集団形式で実施されることが多かった（Lindeman, Fox, & Redelheim, 1993；佐藤・佐藤・高山, 1993）。しかし、SST の有効性が実証されるにつれ、最近では学校全体や学級全体を 1

つの単位として集団 SST を実施し、子どもたちの学校不適応や問題行動を予防するとともに、子どもの社会性を育成・促進しようとする試みが実践され始めている。集団社会的スキル教育とは、学校の教育カリキュラムの中に SST のプログラムを組み込んで、学校全体や学級全体を 1 つの単位として集団 SST を実施することである。

金山・後藤・佐藤（2000）は、小学校 3 年生の 1 学級を訓練群として集団 SST を実施している。その結果、集団 SST を実施しなかった統制群と比べて、訓練群では訓練前から訓練後にかけて社会的スキル得点が有意に増加し、孤独感が有意に低下していた。この結果は、集団社会的スキル教育が社会的スキルの学習に有効であるだけでなく、社会的スキルを学習した児童では主観的な社会的適応感である孤独感の低下にも効果を及ぼすことを実証するものである。ただし、この結果は、あくまで学級全体としてみた場合に、社会的スキル得点の平均値が有意に増加し、孤独感得点の平均値が有意に減少したのであって、学級の成員すべての社会的スキル得点が増加し、孤独感得点が増加したことを意味するわけではない。学級成員の中には社会的スキル教育が有効であった児童もいれば、あまり有効でなかった児童も存在するかもしれない。この点に注目して、江村・岡安（2003）は、中学 1 年生 4 学級を対象にして、8 セッションからなる学級単位の集団社会的スキル教育を実施し、スキル教育の実施前から実施後にかけて社会的スキルが上昇した生徒と低下した生徒を比較検討している。その結果、社会的スキルが上昇した生徒では孤独感も低下していたのに対して、社会的スキルが低下した生徒の場合には孤独感に顕著な変化が認められなかった。このことは、学級を単位とした集団社会的スキル教育では、社会的スキルの学級全体の平均値の変化パターンを検討するだけでなく、個々の生徒の社会的スキルや社会的適応測度の変化パターンを検討することの重要性を示唆している。

集団社会的スキル教育は、他の教科の授業と同様に学級を単位として実施される。教科の授業の場合にも、個人差の激しい複数の児童を対象にして、一人ひとりの習熟度に応じて集団で一斉授業を展開することは教師にとって困難な課題である。そのため、習熟度別に学級を再編して習熟度の高い児童や低い児童に応じた授業を展開するか、習熟度別学級編成をしない通常の学級では標準的な習熟度を示す中間レベルの児童に焦点をあてた授業を行っているのが現実であろう。この点を考慮すると、学級全体の社会的スキル得点（学級平均値）を指標とした場合には確かに集団社会的スキル教育の効果が認められたとしても、スキル教育実施前の社会的スキルが極端に低い児童と中間レベルの児童に対して同様の改善効果があるとは限らない可能性が考えられる。金山・後藤・佐藤（2002）は金山・後藤・佐藤（2000）の訓練群の中から、訓練前の社会的スキルが低く、かつ孤独感が特に高い児童 2 名を抽出して、集団 SST の効果を比較検討している。その結果、孤独感の低減に及ぼす集団 SST の効果は、1 名には認められたが、他の 1 名には認められなかった。これらの結果を参考にすると、社会的スキル教育の効果は、参加した子どもの社会的スキル学習の有無だけでなく、社会的スキル教育前の社会的スキルのレベルに大きく依存すると考えられる。特に、社会的スキル教育実施前の社会的スキルが極端に低い子どもに対しては、個別に集団社会的スキル教育の効果を検討する必要性が高いと考えられる。

そこで本研究では、先述した江村・岡安（2003）の対象生徒の中から、社会的スキルが極端に低

い生徒5名を抽出し、集団社会的スキル教育によって社会的スキルが上昇した生徒とそうでない生徒を比較し、彼らの孤独感に異なる変化が見られるか否かを事例的に検討する。なお、社会的スキルが極端に低い生徒5名は、集団社会的スキル教育の実施前の社会的スキル総得点が学年全体133名の中で最も低い生徒たちであった。

方 法

対象生徒

学級単位の集団社会的スキル教育の対象者は、公立中学校1年生、4クラスの生徒133名（男子73名、女子60名）であった。

抽出生徒

本研究の分析対象は、集団社会的スキル教育の対象となった生徒133名の中から抽出した以下の5名であった。集団社会的スキル教育の介入前の社会的スキル総得点が学年平均値から($M=82.11$, $SD=6.81$) 1SD以下の顕著に低い得点を示すことを基準として、A(女子)、B(男子)、C(男子)、D(男子)、E(女子)の5名を抽出した。各生徒の社会スキル総得点は、A(54)、B(56)、C(62)、D(66)、E(67)であった。

測定尺度

集団社会的スキル教育の効果をみるために介入前(5月下旬)、介入中(7月下旬)、介入後(11月中旬)及びフォローアップ査定として介入終了から3ヶ月後(3月上旬)に、抽出生徒5名の社会的スキルと孤独感を以下の測度を用いて測定した。

(1) 中学生用社会的スキル尺度 (Table1)

本研究では、戸ヶ崎・岡安・坂野(1997)が作成した中学生用社会的スキル尺度を使用した。この尺度は、「関係参加行動」(8項目)、「関係向上行動」(10項目)、「関係維持行動」(7項目)の3つの下位尺度から構成される。計25項目の質問に対して4段階(全然そうでない=1、あまりそうでない=2、ときどきそう=3、いつもそう=4)で自己評定を求めた。

(2) 孤独感尺度 (Table2)

生徒の孤独感を査定するために、広沢・田中(1984)が作成した孤独感尺度から友人関係の下位尺度だけを使用した。これは、10項目から成る尺度で、4段階(あてはまらない=1、どちらかといえばあてはまらない=2、どちらかといえばあてはまる=3、あてはまる=4)で評定が求められた。

(3) 基準データ

本研究の抽出生徒5名を除く残りの生徒128名のデータを基準データとして用いる予定であった。しかし、記入漏れや記入ミスが多数あったものを除いた結果、有効回答者は115名(男子64名、女子51名)となった。これら115名のデータに基づいて、介入前における社会的スキルと孤独感の平均評定値をそれぞれ算出し、各平均値をはさんで±1SDの上下の得点範囲を基準データとした。したがって、基準データは、学年全体の約68%の者が含まれる得点範囲に相当する。なお、Figure 1~Figure 5中に示した灰色の帯は、各平均評定値から±1SDの得点範囲を表示している。

Table 1 中学生用社会的スキル尺度の質問項目

関係参加行動

1. 遊んでいる友だちの中に入れない (*)
2. 自分から友だちの仲間に入れない (*)
3. 友だちと離れて、一人で遊ぶ (*)
4. 休み時間に友だちとおしゃべりをしない (*)
5. 友だちの遊びをじっとみている (*)
6. 友だちに気軽に話しかける
7. 友だちに話しかけられない (*)
8. なやみごとを友だちに相談できない (*)

関係向上行動

1. 困っている友だちを助けてあげる
2. 友だちが失敗したら、はげましてあげる
3. 友だちのたのみを聞く
4. 友だちがよくしてくれたときは、お礼を言う
5. あいての気持ちを考えて話す
6. 引き受けたことは、最後までやり通す
7. 友だちの意見に反対するときは、きちんとその理由を言う
8. 自分に親切にしてくれる友だちには、親切にしてあげる
9. 友だちのけんかをうまくやめさせる
10. 友だちの話をおもしろそうに聞く

関係維持行動

1. 自分のしてほしいことを、むりやり友だちにさせる (*)
2. 友だちをおどかしたり、友だちにいばったりする (*)
3. 友だちに乱暴な話し方をする (*)
4. でしゃばりである (*)
5. 友だちのじゃまをする (*)
6. 何でも友だちのせいにする (*)
7. まちがいをしてもすなおにあやまらない (*)

(*) は、逆転項目。

Table 2 孤独感尺度の質問項目

1. 私 (僕) のまわりには、あまり多くの友だちがいない
2. 私 (僕) には少なくともひとり、同性の親友がいる (*)
3. 自分から友だちを作ったり、好かれようと努力しても、思うようにうまくいかない
4. 私 (僕) は、友だちと親しくなれるように努力している (*)
5. 同じ目標に向かっていっしょに努力できる友だちがほとんどいない
6. 私 (僕) には、困った時に助け合える友だちがあまりいない
7. 友だちは、私 (僕) のしていることに興味や関心を示してくれる (*)
8. 私 (僕) の友情は、結局うわべだけのものにすぎない
9. 私 (僕) には心を開いて話せる友だちがあまりいない
10. 私 (僕) の考えや気持ちを理解してくれる友だちはほとんどいない

(*) は、逆転項目。

ターゲット・スキルの選定

キング・キルシェンバウム(1996)、小林・相川(1999)、ミッチェルソン・スガイ・ウッド・カズディン(1987)、皆川(1999)を参考に、中学校の教師7名、大学院生2名及び心理学を専門とする大学教官1名で協議し、ターゲット・スキルを選定した。生徒の発達段階、学校生活を送る上での必要性、最近の生徒にみられる学校不適応や問題行動の実態を考慮した結果、①自己紹介(6月実施)、②仲間の誘い方(6月実施)、③あたたかい言葉かけ(7月実施)、④協力を求める(9月実施)、⑤お互いを大切に(9月実施)、⑥上手な断り方(10月実施)、⑦気持ちのコントロール(11月実施)の7つを本研究のターゲット・スキルとして選定した。

社会的スキル教育実施準備

各学級の担任教師が授業者となるため、教師を対象にして、社会的スキル教育についての研修を、社会的スキル教育の実施前と実施中各1回ずつ実施した。研修は、心理学を専門とする大学教官が担当し、次の6つの内容について説明した。①社会的スキルを用いることの意義、②モデリング、③行動リハーサル、④フィードバック及び社会的強化の具体的な実施方法、⑤社会的スキルの使用を促すゲームのやり方、⑥日常生活での社会的スキルの使用を促す具体的な方法。さらに、社会的スキル教育に関する各授業の実施前後には、担当教師と大学院生が協議し、指導案や留意点などについて検討した。また、社会的スキル教育の授業内容が学級間で異なるように、全ての学級で、共通の指導案を使用した。なお、8回の社会的スキル教育に関する授業案は、すべて関係教師と大学教官と大学院生が共同で作成した。特に、授業の実践方法については、十分な共通理解が得られるまで討議した。

社会的スキル教育の実施方法

平成12年6月から11月までの約半年間の期間に、総合的学習の時間を利用して学級単位の集団社会的スキル教育を実施した。社会的スキル教育は1セッション100分(50分授業×2)から成る。各学級の担任教師(4名)が各学級単位で8セッションの授業を実施した。授業実施時には、各学級につき2名の大学院生が、トレーナーとして担任教師をサポートした。

各セッションは、①適切な社会的スキルを用いることの重要性についての説明、②問題となる場面の提示、③適切な社会的スキルのモデリング、④仲間との役割を交代しながら実施する行動リハーサルとフィードバックおよび社会的強化、⑤社会的スキルの使用を促す活動、⑥日常生活での社会的スキル使用の奨励、の6つの要素から構成されていた。また、⑤社会的スキルの使用を促す活動では、社会的スキルを必要とするゲーム活動を取り入れ、社会的スキルを積極的に使用させるように促した。このゲーム活動では、社会的スキルを楽しみながら繰り返し練習することができるため、生徒間の相互作用が増加し、獲得した社会的スキルの般化や長期維持が促進されると考えられた。

結果

Figure 1～Figure 4は社会的スキルについて、Figure 5は孤独感について、介入前、介入中、介入後、フォローアップ時(F)の4つの時期別に各抽出生徒の得点を図示したものである。

抽出生徒A

Aの介入前の状態をみると、Fig.4の「関係維持行動」（主に、妨害行動をとらないというスキル）は、満点の28点を示している。しかし、「関係参加行動」（主に、自ら友だちに働きかけるスキル）や「関係向上行動」（主に、友だちを励ましたり、話をよく聞いたりするスキル）は、基準データよりもはるかに低い。特に、「関係参加行動」は、他の4名の抽出生徒と比べても顕著に低い。社会的スキル教育の結果、「関係向上行動」は介入中と介入後に増加したが、「関係参加行動」は5名中最も低い状態に変化しなかった。介入終了3ヶ月後のフォローアップ時では、「関係参加行動」の増加がみられ、総得点の増加もみられたが、平均水準には達していなかった。Fig.5からわかるように、孤独感は介入前からフォローアップ時までの4時期とも、他の4名よりも高い得点で推移しており、明確な減少は認められなかった。

抽出生徒B

Bの介入前の状態をみると、Aと同様に「関係維持行動」は、満点の28点を示している（Fig.4）。しかし、「関係参加行動」や「関係向上行動」は、基準データよりもかなり低い値を示している。社会的スキル教育の進行につれて、介入中や介入後には「関係維持行動」が大きく低下していた。逆に「関係参加行動」や「関係向上行動」は、介入中や介入後に少し増加していた。特に、「関係参加行動」の得点は、フォローアップ時には、基準データの範囲にまで上昇していた。社会的スキルの総得点もわずかずつ上昇したが、フォローアップ時においても基準データには達していない。Fig.5の孤独感得点は、介入前からフォローアップ時にかけて高い水準で維持されており、社会的スキル教育による変化を示さなかった。

抽出生徒C

Cの介入前の状態をみると、3つの社会的スキル下位尺度得点はともに、基準データよりも低い値を示していた。特に、Cの「関係維持行動」は抽出生徒の5名中、基準データに唯一達していなかった（Fig.4）。社会的スキル教育を実施した介入中や介入後では、3つの社会的スキル得点が一定の増加を示したが、3ヶ月後のフォローアップ時では、いずれも介入前のレベルに戻っていた。孤独感は、介入前から介入中にかけて低下し、その後はフォローアップ時まで変化しなかった。フォローアップ時でも孤独感は、基準データまで低下しなかった。

抽出生徒D

Dの介入前の状態をみると、「関係向上行動」と「関係維持行動」は、基準データの範囲に位置していた。しかし、「関係参加行動」だけは基準データよりも大幅に低い値を示した。介入中から介入後にかけて「関係参加行動」が大きく増加し、介入後には満点の32点に達し、フォローアップ時まで満点を維持していた。「関係向上行動」も、介入後には基準データの水準に達し、フォローアップ時では、さらに学年平均値に近い得点にまで上昇した。他方、「関係維持行動」はやや低下傾向を示したが、フォローアップ時では基準データの水準にまで回復した。また、介入後とフォローアップ時の孤独感は、基準データの水準にまで低下し、社会的スキル教育の効果が認められた。

抽出生徒E

Eの介入前の状態をみると、「関係参加行動」と「関係向上行動」は、Cと同様に基準データより

も低かった。しかし、「関係維持行動」は、介入前だけでなく、介入後からフォローアップ時にかけても基準データの水準を維持し、大きな変化を示さなかった。社会的スキル教育によって「関係参加行動」は、介入後まで上昇して基準データの水準に達したが、フォローアップ時では再び低下した。「関係向上行動」は、介入中と介入後に低下傾向を示したが、フォローアップ時には再び介入前と同程度の水準にまで回復した。孤独感は、社会的スキル教育の期間を通じてほとんど変化しなかった。

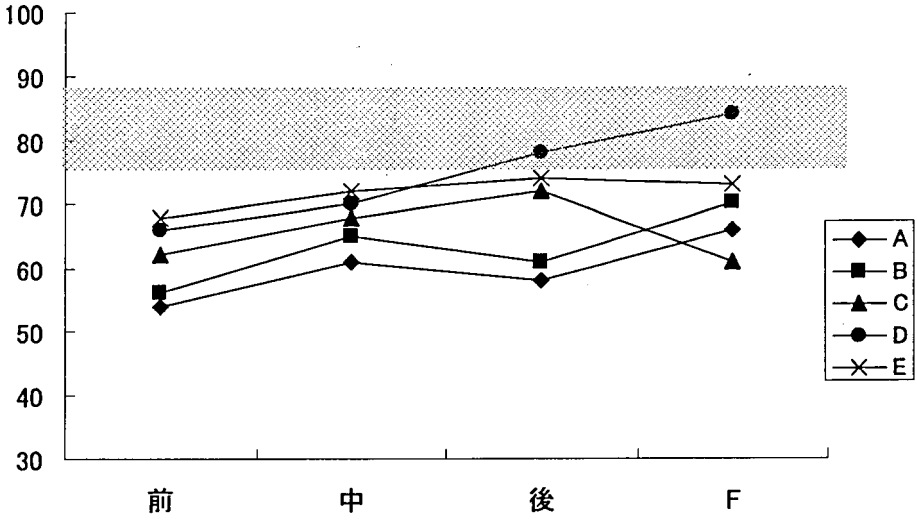


Figure 1 社会的スキル総得点

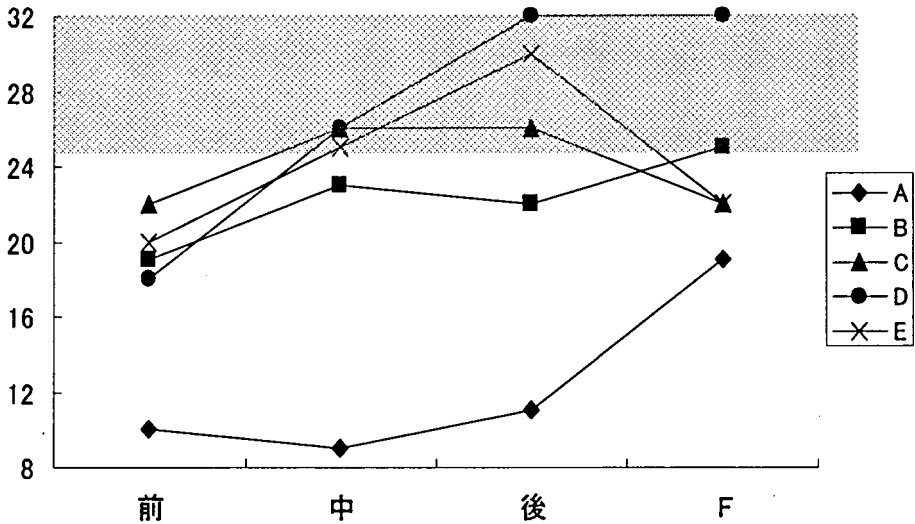


Figure 2 関係参加行動得点

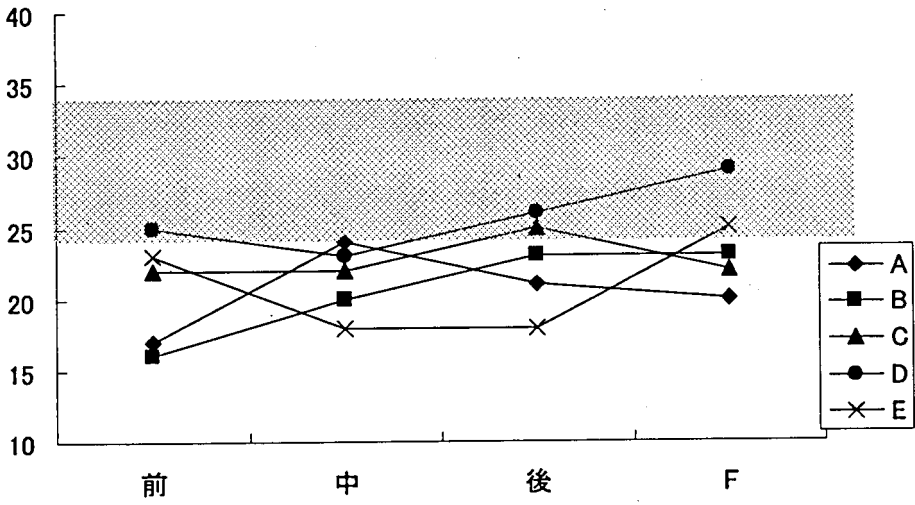


Figure 3 関係向上行動得点

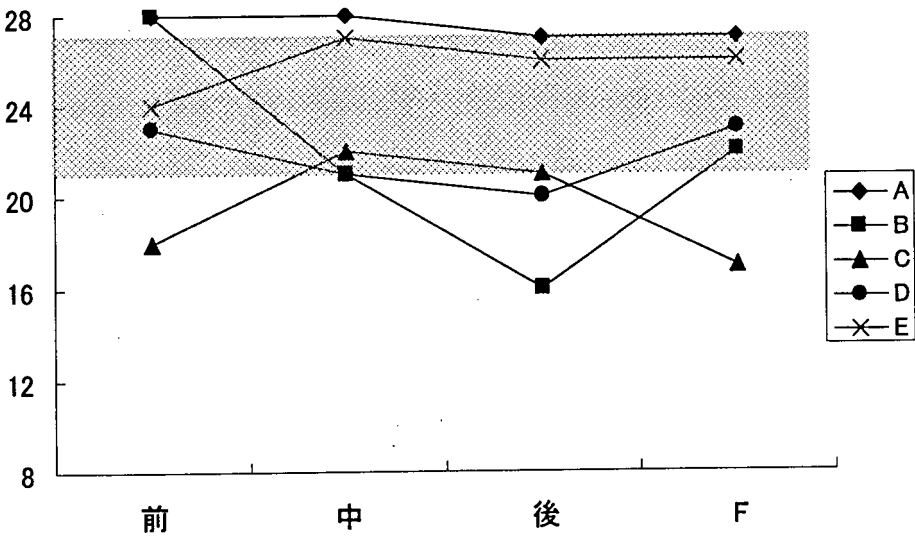


Figure 4 関係維持行動得点

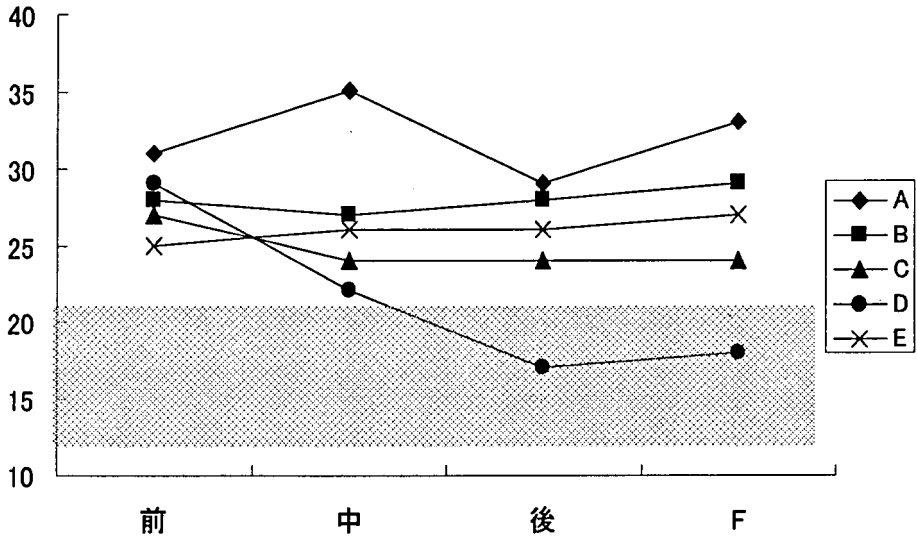


Figure 5 孤独感得点

考 察

本研究では、中学1年生を対象にして学級を単位とした集団社会的スキル教育を実施する中で、社会的スキルの総得点が学年全体の平均値よりも顕著に低い5名の生徒に焦点をあて、社会的スキルの改善や孤独感の低減に及ぼす集団社会的スキル教育の効果を事例的に検討した。Fig.1の社会的スキル総得点に示されているように、集団社会的スキル教育によって5名の抽出生徒の社会的スキルは、徐々に上昇する傾向を示したが、最終的に基準データの水準にまで達したのは、抽出生徒Dだけであった。また、Fig.5からわかるように、孤独感が基準データの水準まで大きく低下したのも、抽出生徒Dであった。抽出生徒Dは、集団社会的スキル教育を通して社会的スキルを向上させ、その結果として孤独感を大きく低減させることができたと考えられる。それに対して、他の4名の場合には、社会的スキル得点が大きく改善しなかったために、孤独感も大きく低下しなかったものと推察される。抽出生徒Dは、介入前に「関係参加行動」だけが低い得点を示し、他の2つの「関係向上行動」と「関係維持行動」は基準データの範囲にあった。集団社会的スキル教育の初期の段階に「仲間の誘い方」や「自己紹介」など、関係作りに関する社会的スキルを教育したことが抽出生徒Dの「関係参加行動」を高めるのに役立ったものと考えられる。

Fig.1の社会的スキル総得点をみると、抽出生徒AとBの得点は、ほとんど差がなく、しかもほぼ同じ変化パターンを示している。しかし、Fig.2の「関係参加行動」では、抽出生徒Aが抽出生徒Bよりも大幅に低い得点を示している。このことは、社会的スキル教育の効果を査定する場合には社会的スキル総得点だけを使用するのではなく、下位尺度得点別に詳細に検討していく必要性を示

唆する。抽出生徒 A のように、自分から仲間に働きかけることが少なく、仲間からの働きかけに対しても応答的に行動しない孤立タイプの生徒には、学級単位の集団社会的スキル教育だけでなく、それと並行して個別 SST を実施し、不足する社会的スキルを十分に補足的に学習させる必要がある。貝梅・佐藤・岡安 (2003) は、極端な引っ込み思案児の場合には、個別 SST を補足的に実施することが、集団 SST の効果を高めるのに役立つと指摘している。集団の中で、個に対応する介入指導をどのように展開していくかが今後の集団社会的スキル教育の課題である。

引用文献

- 江村理奈・岡安孝弘 2003 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究 51, 339-350.
- 広沢俊宗・田中國夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 関西学院大学社会学部紀要, 49, 127-136.
- 貝梅江美・佐藤正二・岡安孝弘 2003 児童の引っ込み思案低減に及ぼす集団社会的スキル訓練の効果 宮崎大学教育文化学部附属教育実践センター研究紀要, 10, 55-67.
- 金山元春・後藤吉道・佐藤正二 2000 児童の孤独感低減に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 行動療法研究, 26, 83-95.
- 金山元春・後藤吉道・佐藤正二 2002 孤独感が高い児童に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 宮崎大学教育文化学部附属教育実践指導センター研究紀要, 9, 1-10.
- キング, C. A., & キルシェンバウム, D. S. 著 (佐藤正二・前田健一・佐藤容子・相川充共訳) 1996 子ども援助の社会的スキル 川島書店 (King, C. A., & Kirschenbaum, D. S. 1992 *Helping young children develop social skills: The social growth program*. Brooks/Cole Publishing Company.)
- 小林正幸・相川充 (編著) 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校一楽しく身につく学級生活の基礎・基本一 図書文化社
- Lindeman, D. P., Fox, J. J., & Redelheim, P. S. 1993 Increasing and maintaining withdrawn preschoolers' peer interactions: Effects of duple prompting and booster session procedures. *Behavioral Disorders*, 19, 54-66.
- ミッチェルソン, L., スガイ, D. P., ウッド, R. P., & カズディン, A. E. 著 (高山巖・佐藤正二・佐藤容子・園田順一共訳) 1987 子どもの対人行動—社会的スキル訓練の実際— 岩崎学術出版社 (Michelson, L., Sugai, D. P., Wood, R. P., & Kazdin, A. E. 1983 *Social skills assessment and training with children: An empirically-based handbook*. New York: Plenum Press.)
- 皆川興栄 1999 総合的学習でするライフスキルトレーニング 明治図書
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993 引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練—コーチング法の適用とその維持効果— 宮崎大学教育学部研究紀要教育科学, 75, 13-26.
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 1997 中学生の社会的スキルと学校ストレスの関係 健康心理学研究, 10(1), 23-32.